



TITLE:

J.クチンスキー「一七五〇年から  
現在に至るイギリス労働階級状態  
小史」

AUTHOR(S):

岸本, 英太郎

---

CITATION:

岸本, 英太郎. J.クチンスキー「一七五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史」. 経済論叢 1951, 67(6): 420-444

ISSUE DATE:

1951-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132224>

RIGHT:

京都大學經濟學會

# 經濟論叢

第六十七卷 第六號

獨占段階における地方經濟の不均等と

財政の役割……………島 恭 彦

ドイツ金融資本の構造的特質（一）……………大 野 英 二

利子・所得及び雇傭……………鎌 倉 昇

J. クチンスキー「1750年から現在に至る

イギリス勞働階級狀態小史」……………岸 本 英 太 郎

---

昭和二十六年六月

「J・クチンスキー」〔一七五〇年からイギリス労働階級状態小史〕

第六十七卷

四二〇

第六號

一一二

# J・クチンスキー「一七五〇年からイギリス労働階級状態小史」

Jürgen Kuczynski, A Short History of Labour Conditions in

Great Britain, 1750 to the Present Day, third,

enlarged edition, 1947

岸 本 英 太 郎

る。

周知の様に、クチンスキーは、マルクスの所謂労働者階級の絶対的窮乏化の理論 (Theorie der absolute Verelendung, Theory of absolute deterioration) を英・獨・佛・アメリカ等の労働者階級について立證した學者として有名であるが、先進國イギリスについては、とかく、この絶対的窮乏化説を信賴しない、反對者が絶えない點に鑑み、又更に第二次大戰中の労働統計の容易に知り得ない現狀に鑑み、産業革命期から最近に至るイギリスの労働状態を究明した本書を紹介する事は何程か意義があるであらう。

本書は次の四章から成つてゐる。

多くの優れたユニークな労働状態の統計的研究で周知知られているJ・クチンスキーは、今次世界大戰の末期から戦後にかけて、「資本主義下における労働状態小史」(A Short History of Labour Conditions under Industrial Capitalism)なる叢書を次々に刊行し、イギリス、ドイツ、フランス及びアメリカの労働状態を歴史的に検討した。ここに紹介せんとする「イギリス労働状態小史」は本叢書の第一巻第一冊であり、産業革命期から第二次世界大戰終結に至るまでのイギリスにおける労働者階級の状態を一貫して扱つたものとして注目すべき文獻であ

第一章 一七五〇年—一八五〇年。

第二章 一八五〇年—一九〇〇年。

第三章 一九〇〇年—一九三九年。

第四章 二つの世界大戦中の勞働狀態

註(1) 勞働狀態に關する J・クチンスキーの著作には次の如きものがある。

Jürgen Kuczynski, Die Entwicklung der Lage der

Arbeitschaft in Europa und Amerika, 1870—1933.

1934.

Labour Conditions in Western Europe, 1890 to 1935.

London, 1937

New Fashions in Wage Theory, London, 1937.

Hunger and Work, London, 1938.

The Conditions of the Workers in Great Britain, Germany and the Soviet Union, London, 1933—1938, 1939.

(2) 本叢書は次の六冊から成つてゐ、且下理論的問題に關する第七冊が執筆されつゝある様子である。

Vol. I. Part 1, Great Britain, 1750 to the Present Day.

Part 2, The Empire, 1800 to the Present Day.

Vol. II. The United States of America, 1789 to the Present Day.

J・クチンスキー「一七五〇年から一八九〇年までのイギリス勞働階級狀態小史」

Vol. III. Part 1, Germany, 1800 to the Present Day.

Part 2, Germany, under Fascism, 1933 to the Present Day.

Vol. IV. France, 1700 to the Present Day.

## 二

一七五〇年から一八五〇年に至る時代は、産業革命の全時期を包含する時代であり、勞働者階級の資本家階級への全面的な從屬が社會機構的に確立し、所謂「原始的勞働關係」が支配した時代であつた。

周知の様に生産様式の變革はマニユファクチュアにあつては勞働力を出發點とし、大工業においては勞働手段を出發點とする。マニユ時代にあつては、勞働者の手工的な熟練技能に絶對的に依存したために、資本の剩餘勞働に對する渴望は、生産關係の自然法則によつて達成されず、勞働者の個人的恣意によつて制限された。機械の出現は事態を一變させた。機械においては勞働手段の運動及び活動が勞働者に對し自立化し、勞働手段それ自體がその人間助手における特定の自然的制限に衝突しない限りは、絶えず引續いて生産する産業的な自動的無窮運動機構となる。機械は商品を低廉ならしめ、勞働日中で勞働者が彼自身のために要する部分を短縮して、彼の勞働日のうち、彼が資本家に無償で與える部分を延長し、勞働日を延長

し、労働を強化し、産業豫備軍を生産し、婦人や幼少年を剩餘價值生産機械に轉化し、もつて労働力を搾取する最も強力な手段となる。

かくて産業革命は労働者階級の状態を急速に悪化させたのである。「十八世紀の前半、大衆の状態は悪かつたが悪い方向へは向つていなかった。反對に多少とも改善の方向に向つてゆくことも不可能ではなかった。收穫はよく、食料の價格も割合安定を續けて居り、失業も増大というより減少の方向に向つていた。小小作農 (tenant farmer) 達が非常に苦しんでいた事は事實であり、イングランドの南西地帯の大衆の状態が悪化の方向に向つていた事も事實であるが、イギリスを全體として見れば、大衆は悪化の方向に向つてゐるものより改善の方向に向つてゐたものの方が多かつたといつていいのである。すべてこれらの事は世紀の半ばを境として急速に變化し、世紀の終りに近づくにつれて一層急速に變化した。一七五〇年にはじまり、一八五〇年に終る時期は産業革命の時期であり、産業的資本主義 (industrial capitalism) の最初の時代を包含する時代であつた。産業的資本主義は労働者階級の状態を急速に悪化させ、同時にイギリスの富、その生産力、その經濟的資源は急速に増大した。支配階級は、特に産業資本家はますます立派な地位につき、富み・強力となり、一方大衆は貧困化し、一層抑壓されるに至つたのである。」實質賃銀は次の如く變化した。

貨幣賃銀・生計費・實質賃銀

[1850=100]

1759—	68	81	77	105
1769—	78	85	84	101
1779—	88	86	85	101
1789—	98	94	97	98
1799—1808		114	137	83
1809—	18	114	159	72
1819—	28	98	124	79
1820—	26	98	122	80
1827—	32	93	114	82
1833—	42	95	110	86
1843—	49	98	109	90

J. Kuczynski, A Short History  
p. 18

クチンスキーは「この時期の賃銀統計は比較的低い價值しか持たない。指數はほんの少數の産業をもととしたもので、重要な産業、例えば炭坑業のごときが脱落してゐる。そして含まれてゐる産業も少數の仕事の熟練労働者を代表するに過ぎない」と述べているが、更に次の様な注意を與えてゐる。

「統計は眞の平均的賃銀を示すものではない。何となれば、それは例えば、特に低い賃銀が支拂われる労働者の數的優勢化によつて惹起された平均賃銀の低下が計算に入つていないからである (それは婦人や子供に由來する)。若し我々が特に低賃銀の婦人や子供の雇傭の増大を計算に入れるなら、一八一八年までの賃銀の低下は一層急速であつたであらうし、この時以後の實質賃銀の回復も或は一層の低下と變つていたかも知れ

ないのである。又賃銀資料の殆んどは一週間完全に働いた場合のそれである (full time working week)。しかしこの期間には失業の深刻に生じた多くの年があり、又労働の供給が非常に不十分であつた年もあつた。この様な事情の變化は統計には反映されていないのである。不幸にして失業による變化に關しては利用しうる正確な資料はないが、或る一つの説明によれば、それは若し我々が失業を計算に入れるなら、一八三三年—四二年及び一八四三年—四九年の間の賃銀賃銀の増大は、全部無くなつて了わないうまでも非常に僅かであることを自信をもつていい得るとしてゐるのである」と。

クチンスキーは舊著「西ヨーロッパの労働状態」において「失業や婦人子供の賃銀を考慮に入れるなら十九世紀の中央に至るまでの純賃銀 (net real wages) は増大したというより低下したと言つた方が安全である」と述べてゐる。尚クチンスキーは、現實に賃銀を低下せしめたものとして割金制 (system of fines) と物給賃銀制 (truck system) をあげてゐる。

以上は賃銀賃銀に關する變動の考察であるが、我々が若し、これ以外の労働條件 (labour conditions) の惡化、特に労働時間の延長を考慮するなら、労働者階級の狀態の惡化は極めて著しかつた事を了解し得るであらう。十九世紀の三十年代、更に四十年代においてさえ、多くの工場においては十四、十六、十八時間労働日が見られたのであり、消耗の烈しさは、労働者が四十

「クチンスキー」一七五〇年からイギリス労働階級狀態小史「現在に遡る

歳で老人と稱されたことの中によく示されている。「十九世紀の四十年代はおそらく、イギリスの歴史の他のどの時代よりも労働時間が長かつた。それは十九世紀の最初の三分の一期を通じて増大し、それに續く年代において、不斷に増大して行つた。益々多くの數の労働者が、一日に十六時間も十八時間も労働しなければならなかつたのである。……エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の狀態』や政府の諸報告や、労働状態に關する其他の研究から、労働が窮乏と持續 (endurance) の限界に達してゐたことは明らかである。労働日はこれ以上延長する事は出来なかつた。賃銀はこれ以上低くする事は出来なかつた。労働者階級の健康はこれ以上弱めることは出来なかつた。さもなければ労働を完全に休止する外なかつたのである。」クチンスキーは「十八世紀の後半、労働状態は餘程惡化した。そして十九世紀の前半に最惡の狀態に達したように見える」と述べてゐる。

以てこの時代で最も注目すべき出来事は、團結禁止の解除であつたということが出来よう。

フランス大革命はイギリス労働者階級に深刻な影響を與え、大衆の間の不安は非常に大きかつたので、組織的な労働者の抗争から資本家階級の安全を守るためには一八〇〇年、團結禁止法 (Combination Law) が通過させられねばならなかつたのである。<sup>(10)</sup>だが労働者階級の抗争は、それは無組織で不成功が普通

であつたが、大衆の壓力は非常に強かつたので、議會は一八二四年團結禁止法の廢止を決定したのである。<sup>11)</sup>この壓力が又一八四七年のかの十時間労働法 (Ten Hours Act) を成立せしめたのである。だがこれらの團結禁止法の廢止や十時間労働法等の十九世紀の二十年代、三十年代及び四十年代の進歩的立法のため、諸運動は多くはブルジョア急進主義者 (bourgeois Radicals) や人道主義者等の進歩的思想をもつた人々によつて指導されたのであり、<sup>12)</sup>三十年代末から四十年代の組織的な労働組合運動も又然りであつた。チャーティスト運動 (Chartist movement) の經過中、はじめて兩者の完全な分離が行われ、以後、プロレタリアートの独自の運動が展開されはじめるのである。

註(1) J. Kuczynski, A Short History of Labour Conditions in Great Britain, 1750 to the Present Day. (以下

A Short History と略稱す) pp. 15—6

(2) Ibid., p. 40.

(3) Ibid., pp. 19—20

(4) J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe, p. 56

(5) J. Kuczynski, A Short History, p. 21

(6) Ibid., p. 26

(7) Ibid., p. 34

- (8) J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe, pp. 57—8
- (9) J. Kuczynski, A Short History, p. 21
- (10) Ibid., p. 34
- (11) Ibid., p. 36. Cf. Sidney & Beatrice Webb, History of Trade Unionism, M. Beer, History of British Socialism, Vol. II, D. G. H. Cole, A Short History of British Working Class Movement, Vol. I, etc.

### 三

「資本主義及び労働状態發展の新たな時期の開始は既に十九世紀の前半において見る事が出来るのである。その主要な性格は生産及び搾取の變化せる方法であつた。それは、より廣汎な機械の利用とますます複雑な機械を利用して、労働過程を過度化 (intensification) するところであり、相對的剩餘價值の生産であり、労働日を短縮して時間當りの労働を多くする事であつた。労働人口のより少い割合の雇傭(兒童の減少と或る種の産業における婦人の減少)で、これら被傭者に對する一層よい訓練の實施であつた(よりよい廣汎な初等教育)。實質賃銀の増大と搾取の増大であつた。これと關連して労働貴族の生成と熟練工の間における堅實な労働組合運動の發展であつた。又植民地への

大規模な資本の輸出であり、その結果としての資本家的方法（主として炭坑、鐵道敷設及びプランテーションにおいて）による土着民の搾取の増大であつた」とクチンスキーは、一八五〇年にはじまり一九〇〇年に終る時期を特徴付けている。

この絶對的剩餘價値の生産から相對的剩餘價値の生産への轉換を告げる最初の現われは工場法の成立發展であつた。「搾取方法の重點の變化の最初の現れは工場立法の初期の歴史の中に見出す事が出来る。一八四四年工場法（7 & 8 Vic, c. 15, An Act to amend the Laws relating to Labour in Factories）の最初の效果的な部分から一九〇一年の統一工場法（Edw. VII, c. 29, Factory and Workshop Consolidation Act）に至るまで澤山の工場法が通過した。これらの工場法はすべて幼少年及婦人に關するものであり、一八六七年までには、その適用の範圍は五十人以上の労働者を雇儲するすべての事業場を包括したのである。これら工場法は主として労働日の規制であるが、また衛生状態や災害防止及び兒童教育の條項を含んでいた。工場法による労働時間の短縮によつて生れた新しい暇は労働組合の活動の時間と與へ……家庭生活を改善した」。

この時代、労働時間は次の如く短縮され、生産力は増大し、實質賃銀は上昇した。

J. クチンスキー「一七五〇年から一八五〇年までのイギリス労働階級状態小史」

工業及び炭坑業における一時間  
當り労働生産性, 1843—1903  
1900=100

	指 数	増大率
1843— 49	45	—
1849— 58	49	10
1859— 68	61	24
1869— 79	79	30
1880— 86	93	18
1887— 95	94	1
1895—1903	99	5

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 48

週當り労働時間指數, 1843—1903  
1900=100

	指 数
1843— 49	115
1849— 58	114
1859— 68	110
1869— 79	107
1880— 86	103
1887— 95	102
1895—1903	100

J. Kuczynski, *A Short History*,  
p. 47



貨幣賃銀、生計費、實質賃銀（各平均）

1849—1903, 1900=100

	貨幣賃銀			生計費		實質賃銀	
	總額	純		總額	純	總額	純
1849—	58	60	59	103	58	57	
1859—	68	68	67	106	64	63	
1869—	79	82	81	110	75	74	
1880—	86	83	81	101	82	80	
1887—	95	89	87	96	93	91	
1895—1903	96	95	95	96	99	99	

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 53

この様な實質賃銀の上昇と労働時間の短縮を伴つた労働生産性の上昇は、「一部は技術的進歩により、一部は生産過程のよりよい配列、即ち組織的方法によつたが、最大なる部分は労働強化の増進であり、労働者の酷便によるのである」<sup>3)</sup>。それは次の表によく示されている。

しかもかかる實質賃銀の上昇は「労働者に餘りによいように示されている。都市や大きな町の労働組合の活動によつて得られた賃銀のすべての發展は指數に誠實に反映されているが、小

綿業における労働生産性の發展

1829—31=100

大工場における1000人労働者の労働者當數		一織夫 當機數	
年	數	年	數
1836	10	1820	0.9
1850	7.5	1850	1—2
1865	3.6	1878	2—3
1903	3.0	1885	3—4
		1893	4—6

*Ibid.*, p. 49

	週當り 労働時間	労働者一人當り生産量			
		綿 絲		綿 製 品	
		年當り	時間當り	年當り	時間當り
1829—31	100	100	100	100	100
1844—46	87	178	205	323	372
1859—61	87	237	273	615	708
1880—82	82	357	436	775	948
1891—93	82	431	526	762	932

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 49

企業や小さい町の労働状態の遅れている點は賃銀統計には不充分にしか反映されていないのである。更に短時間労働 (short time work) が非常に多くなっている點は統計には全然表示されていないのである。又時間賃銀から個數賃銀制への變化も看過されているし、全期間を通じて進行した熟練労働から不熟練労働への労働の稀薄化の問題は賃銀統計には示されていないのである。……最後に次の如き興味ある發展を忘れてはならない。即ち平均賃銀は各産業の賃銀の増大より一層大きい増大率を示しているということである。それは十九世紀後半においては賃銀の低い産業より、賃銀の高い産業への變動が存したからである。即ち主として繊維産業より鐵鋼業や金屬産業への移行である。勿論繊維産業の労働者は増大はしたが、鐵やスチール其他の労働者の方が遙かに多く増大したのである。個々の産業の賃銀は安定していても、平均賃銀は増大したのである。何となれば澤山の労働者が、賃銀がより高く支拂われる産業において働くことになるからである。……生計費指數も實質賃銀指數も實際のものより労働者に一層有利な状態において示されているのである。だから、實質賃銀が上昇している時には幾分差引かねばならないし、それが安定を示している時には實際には下つていると考へねばならないのである」。

だがともかく實質賃銀のかかる上昇を可能ならしめたものは、イギリスの莫大な海外投資と植民地掠取とによる豊かな超

了。クチンスキー「一七五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史」

過利潤の存在と労働者運動の發展であつた事を忘れてはならないのである。クチンスキーは舊著「西ヨーロッパにおける労働状態」の中で、一八五〇年から一九〇〇年に至る期間の労働状態を次のように要約している。——「一八五〇年—一八七〇年、イギリス以外の地でイギリス資本によつて雇附せられた労働者の犠牲において、労働状態の改善が行われた。六〇年代末の労働状態は、絶對的意味において二十年代のはじめよりよかつたといえよう。一八七〇年—一九〇〇年、この期の全體を通じて労働状態は一般には改善されないで、九〇年代末は、六〇年代末と比較して恐らく同様であつたか或は幾分悪化したのである」。

この様に考えるなら、我々はこの十九世紀後半期の労働時間の短縮や實質賃銀の上昇についてこれを誇大に考へてはならないのである。労働の強度化の著しい増進は労働時間の短縮と實質賃銀の上昇を殆んど相殺したのである。この事はこの期間、労働者階級の榮養状態が非常に悪化した事の中に如實に示されているのである。クチンスキーは次の様に述べている。——「榮養不良 (malnutrition) は資本主義の嘗つてのどの時代よりも夥しく、實質賃銀は資本主義の歴史においてどの時代よりも高いにもかかわらず、榮養不良は以前よりより夥しいのである。労働時間は減少し、閑暇は資本主義の歴史においてどの時代よりも長くなつたにも拘らず榮養不良はこれまでより一層夥しい、

のである。労働運動はより組織化され、より活動的となつたにも拘らず、資本主義の過去の歴史のどの時代よりも夥しいのである」と。

労働時間の短縮、實質賃銀の上昇とこの營養不良の夥しい事實との間の一見矛盾して見える現象に對しクチンスキーは次の様な説明を與えている。——「はじめ見た時にはこれらの異つた傾向は全く矛盾する様に見えるのであるが、しかし若し我々が都市における衛生状態はよくなつたが一層人口が稠密になつたこと、労働時間は短くなつたが、労働が一層強度化されたこと、實質賃銀は増大したが食物の質や價值が悪化したことをさすれば、十九世紀後半におこつた事を理解する事が出来るであらう。多くの點において労働状態は改善されたが、他の點において悪化し、そして支配的なのはこの悪化の點であつたのである……事實の上に立つて主張し、可能なきがりの視角から説明すれば、十九世紀後半においてイギリス労働者階級の状態は改善されなかつたのである。我々はしかし全體として云えば、イギリスの労働者階級がフランスやドイツやアメリカ合衆國に比べては尨大な数の移民労働者が労働状態の一般的標準を押し下げているのである——の労働者に比較してさへも、より多く改善されたことを忘れてはならないのである」と。このことを考えれば、我々は十九世紀末、チャールス・ブースがロンドンで、二十世紀のはじめ、シーボム・ラウンターがヨークで調査した

労働者階級の状態が、驚くべき劣悪さを示していた事を充分理解する事が出来るのである。

扱て、労働組合が組織された工場、鑛山や工場法が適用された工場や事業場においては労働時間は短縮されたが、工場法の適用をうけない零細企業においては驚くべき低劣な労働条件が支配していたことを忘れてはならぬのである (sweating industry)。「賃銀や労働時間に關して云えば、これらの (sweating industry) 岸本労働者の地位は極度にみじめであつたことが考えられる。……成年男子について云えば彼等は食事のための普通の時間とお茶のための半時間をいれて一日に十六時間も働いているのである。或る場合には労働時間はこれより短いものもあるが、しかし他の場合には食事時間を除いて十八時間も働いているのである」(Report to the Board of Trade on the Sweating System at the East End of London, London, 1887. House of Commons, Vol. LXXXIX, pp. 8, 9)

(1) J. Kuczynski, A Short History, p. 43  
(2) Ibid., pp. 45—6

向工場法の歴史については次の書物を参照せよ  
Hutchins & Harrison, A History of Factory Legislation,  
1911

M. W. Thomas, The Early Factory Legislation, 1948

H. R. Mess, *Factory Legislation and its Administration*, 1936

(3) J. Kuczynski, *ibid.*, p. 48

(4) *Ibid.*, pp. 81—2

(5) イギリスの對外投資は一八六〇年までに二〇、〇〇〇、〇〇〇ポンドに達した。十年後にはそれは四倍に増加し、次の三十年間に再び四倍となり、約三〇〇、〇〇〇、〇〇〇ポンドを算するに至つたのである (J. Kuczynski, *A Short History*, pp. 56—7)。尙 J. Kuczynski, *Labour Conditions in Western Europe*, p. 55 参照

(6) J. Kuczynski, *Labour Condition in Western Europe*, pp. 63—4

(7) J. Kuczynski, *A Short History*, p. 65

(8) *Ibid.*, pp. 65—6

(9) Cf. Charles Booth, *Life and Labour in London*, B. S. Rowntree, *Poverty, A Study of Town Life*, 1906

(10) J. Kuczynski, *A Short History*, p. 51

#### 四

周知の様に十九世紀中葉のイギリスの繁榮 (Victorian Prosperity) は一八七三年の大恐慌以後、所謂 Great Depression の時期に入り、獨占資本主義金融資本主義へ推移しはじめたが、

「J. クチンスキー」【一七五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史】

この推移は同時に植民地略取の盛んを飛躍、世界分割闘争の激化と結びついていたのである。このことが一八七三年以來の不況にもかかわらず、否この自由主義的繁榮の終焉の故に變質しはじめた階級闘争 (新組合主義への移行) を抑制し、腐敗せしめるために、十九世紀末葉に至るまで、實質賃銀の上昇を、特に労働貴族のそれを (労働貴族の培養) 可能ならしめたのである。しかしこの上昇が驚くべき労働強度化による搾取の増大と結びついていた事は既に論じたところである。

\* 七〇年代以來の實質賃銀の上昇を労働貴族と労働者大衆とに分けて考察すれば次の通りである。

労働貴族 労働大衆 (1900=100)		
1869—1879	85	92
1880—86	88	85
1887—95	91	90
1895—1902	98	95

J. Kuczynski, *A Short History*, p. 55

十九世紀後半期の労働状態の改善は主として工業や炭坑のキイ職業（Key Jobs）の少数のグループのそれであつて、これをもつて労働者大衆の生活状態が悪化した事を看過してはならないのである。

抑て「帝國主義、金融資本主義、獨占主義主義、戦争と革命、衰退と寄生性、これらが十九世紀末頃にはじまつた資本主義の第三の時期の性格である。資本主義の新しい性格は又労働運動の發展及び擡取の變革的方法の新しい時期を意味した」とクチンスキーは第三章の「一九〇〇年—一九三九年」を書出して

經濟循環	失業による労働力の減退（總労働力を100とする）	失業並びに不生産の過剰労働力の減退	庫備に使用される國民所得の百分比
1880— 86	94.1	93	2.6
1887— 95	94—8	93	2.4
1895—1903	96—5	93	4.4
1904— 08	94—8	90	3.5
1909— 14	96.0	88	6.1
1915— 23	94.4	86	25.0
1924— 32	87.1	77	2.5
1933— 39	85.9	75	5.9

J. Kuczynski, ibid., p. 89

貨幣賃銀、生計費、實質賃銀  
(各平均) 1904—1939, 1900=100

	貨幣賃銀		生計費	實質賃銀 (各平均)	
	總額	純	完全失業を 含む	完全失業を 含む	完全失業を 含む
1904— 8	100	97	102	97	95
1909—14	104	101	108	95	93
1915—23	188	180	204	89	87
1924—32	186	164	181	98	91
1933—39 *	185	163	169	104	96

\* 不安定な循環、危機や不況の年が落されている、戦争によつて妨げられた循環

J. Kuczynski, ibid., p. 92

不生産性の増大

經濟循環	指 數
1880— 86	100
1887— 95	102
1895—1903	104
1904— 08	107
1909— 14	111
1915— 23	157
1924— 32	123
1933— 39	130

J. Kuczynski, ibid., p. 90

十九世紀後半に見られた労働条件の「改善」は消失して悪化に轉じ、莫大な失業者軍が出現し、不生産的な軍需生産が増大し、資本主義の寄生性が増大した。これらのこの時期の性格を統計によつて示そう。

勞働大家及び勞働貴族の實質賃銀

1895—1903=100

	勞働貴族	勞働大家
1895—1903	100	100
1904—08	93	97
1909—14	92	96
1924—32	91	95

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 92

擬て上述の賃銀指數は「勞働者階級の購買力の變化を示してはいるが、勞働者階級がいかなる生活をしてゐるかは示してゐないのである。勞働者の購買力は十年前より少くなつてゐる事を意味しているが、勞働者が充分買ふことが出来るかどうかということは示してゐないのである」<sup>4)</sup>。この研究は二十世紀に入つて澤山なされたが、ラウントリーの研究に従つて、「肉體的な健康に必要なもの」(“the necessities of physical fitness” クチンスキーが「飢餓と勞働」 Hunger and Work, 1938) の中で使つた言葉(岸本)を買ふに必要なラウントリーの最低額以下の賃銀しか得てゐない勞働者のパーセンテージをクチンスキーは次の様に算定してゐる。因みにラウントリーの勞働者家族に必要な最低額は、夫が特に烈しい勞働はやらないで、三人の子供を含んだ家族で、戦前は約週五十五シリングであつた。

J. クチンスキー「一七五〇年から現在に至るイギリス勞働階級狀態小史」

戦前ラウントリーの最低額以下の賃銀を得てゐた勞働者の百分比

産業	男子勞働者 百分比	女子勞働者 百分比	總勞働者 百分比
Mining other than coal-mining and quarrying...	75	75	75
Treatment of non-metalliferous mine and quarry products	10	80	11
Brick, pottery, glass, chemical products, etc	4	70	16
Metal, engineering, shipbuilding, etc.	5	55	11
Textiles	40	50	46
Leather	12	65	24
Clothing	12	35	29
Food, drink, tobacco	7	35	18
Woodworking	6	25	8
Paper, printing, stationery, etc.	1	15	5
Transport and storage (other than railways)	3	35	4
Public utility services	55	88	57
Coal mining	80	—	80
Building	50	—	50
Railways	25	—	25
Agriculture	100	100	100

クチンスキーはこの比率を數に變えてその數を次の様に算定してゐる。―「若し我々がこのパーセンテージを工業及び農業

に従事している労働者の數に適用すれば、吾々は約四百萬人の男子労働者が、ラウントリの最低限即ち三人の子供を含んだ五人の家族が生き、健康でいる事が出来る最低額以下しか得ていないこと、そして約二百萬人の女子労働者がラウントリの最低限以下で頼るものもなく生活していることが分るのである。若し我々がこれから家族を持たないか或は少しの家族しか持たないすべての労働者及び既婚婦人を除外するなら、そして若し三人の子供の家族に對する最低額は得ているが、これより家族の多い労働者及び誰かが彼女に依存しているすべての女子労働者を包含するならば我々は大雜把に見積つても、一九三七七年において、働けば健康を保つことも成長することも出来ないような状態で生きている男子、婦人及び兒童の數は一千萬人に達するのである。彼等は彼等が行つてゐる疲勞する仕事から完全に回復することが出来ないものである。一千萬人の働く男や女や子供が、一般には幸運であつたと考えられていた時代に不十分に食べ、不十分に着、悪い住宅に住んでいたのである。これらの數字は、食料問題に關する第一のイギリスの權威によつて支持されている事は注目に値する。即ちジョン・オール卿 (Sir John Ott) は次の様に書いてゐるのである。『全人口の1/3に近い人々の食物が、我々が健康にとつて必要であるとして知つてゐる標準に達してゐないのである』(John Ott and David Lubbock, *Feeding the People in War Time*, London, 1940, p. 1)

と。少し舊いがウェブ夫妻は、一九二一年に著わし、一九二〇年に再版を出した「防貧論」(The Prevention of Destitution)の中で次の様に述べてこの事實を裏書きしてゐるのである。『イギリスの人口のうち一千萬或は千二百萬人までが家族に對し週一ポンド以下の所得しかないものであつて、病氣による繼續的失費は彼等の經濟的獨立を不斷に脅すのである。従つて病氣が普通の程度以上に生ずれば、家族は貧窮の泥沼におちてゆくのである』と。その第乏の深刻さを知るべきである。

扱て一九〇〇年—一九三九年の時代は失業が甚大化し、深刻化した時代であつて、これが労働者階級の窮乏化を押し進めた大きな原因であつた事は論ずるまでもない。次の統計を見よ。

失業率、1900—1939

(百分比)

1900	2.5	1920	2.4
1901	3.3	1921	16.6
1902	4.0	1922	14.1
1903	4.7	1923	11.6
1904	6.0	1924	10.2
1905	5.0	1925	11.0
1906	3.6	1926	12.3
1907	3.7	1927	9.6
1908	7.8	1928	10.7
1909	7.7	1929	10.3
1910	4.7	1930	15.8
1911	3.0	1931	21.1
1912	3.2	1932	21.9
1913	2.1	1933	19.8
1914	3.3	1934	16.6
1915	1.1	1935	15.3
1916	0.4	1936	12.9
1917	0.7	1937	10.6
1918	0.8	1938	12.5
1919	2.4	1939	10.3

鑛業及び工業における  
時間當り労働生産性

經濟循環	指數
1895—1903	99
1904— 08	101
1909— 14	103
1924— 32	111
1933— 39	136

J. Kuczynski,  
ibid., p. 102

標準労働週の指數

經濟循環	指數
1895—1903	100
1904— 08	99
1909— 14	98
1924— 32	88
1933— 39	87

J. Kuczynski,  
ibid., p. 102

擬て次に、標準労働週 (standard working week) は次の如く短縮され、一時間當り労働生産性は次の如く上昇した。

一年或は一年以上  
の失業者の百分比

1932年12月	21.1
1933 〃	25.4
1934 〃	24.2
1935 〃	26.5
1936 〃	25.1
1937 〃	21.3
1938 〃	19.3
1939 8月	25.8

J. Kuczynski,  
ibid., p. 98

「この労働生産性の急速な上昇は一部分は労働の強度化の増大により、即ち個々の労働者を一層強制したことに由来したものであるが、このことは労働者階級の間に廣汎な神経系の疾患を惹起し、そしてその結果として一般的には労働者階級の健康を非常に悪化させたのである」とクチンスキーは述べている。

二十世紀に入つて労働者階級の状態の悪化に直接に影響した事件を拾つて見れば、次の如きものがあつた。

一つの小戦争 (南阿戰爭)

二つの世界大戰 (一九一四年—一八年及び一九三九年—四五

年)

二つの恐るべき世界恐慌 (一九二一年—二二年、及び一九二九年—三二年)

深刻なインフレーション政策の時期 (一九一五年—二〇年)

「多くの深刻な恐慌や二つの戦争を含む資本主義の時期が、それ以前の時期に比較して、労働状態や生活状態が非常に悪化したことは明らかである。……かくて我々は今や次の如きいうことが出来るのである。——巨大な技術的進歩にも拘らず、生産される商品の驚くべき増大にも拘らず、莫大な富の創造にも拘らず、労働者階級は、その状態が常に悪化しつつあることを経験したのである。それはすべての點においてではないが、又必ずしも同じ側面においてではないが、そしてすべての階層と



いうわけではないが、労働状態及び生活状態のあらゆる點を全體としてとつて見れば、そうなのである。<sup>10)</sup>

ここに注意すべきは二十世紀に入つてからの搾取方法は絶対的剩餘價值の生産（一八五〇年頃までの支配的な形態）と相對的剩餘價值の生産（十九世紀後半期の支配的傾向）との兩方法を結合しようとした點である。これは野蠻性のはじまりであり、驚くべき搾取の強化である。ドイツにおいてこれが典型的に現われ、兒童労働は増大し、労働日は延長され、實質賃銀は低落したのである。腐朽しつつある資本主義は、洗練された搾取方法（相對的剩餘價值の生産）に加ふるに原始的な搾取方法（絶対的剩餘價值の生産）を用いはじめたのである。これはイギリスにもおこりつつあるのである。實質賃銀は世紀の交以來低落し、續業における労働日は、今次戦争前には、前大戰に續く年よりもすでに延長されているのであり、労働の稀薄化（dilution of labour）はすべての産業において行われつつあるのである。資本主義が續く限り、一層の労働日の延長や兒童労働がひそかに或は公式に（officially）導入されると考えねばならない。労働力の急速な消耗は支配階級を悩ますのであろう。何となれば龐大な産業豫備軍が何十萬という失業者によつて構成されているからである。<sup>11)</sup>

著書「西ヨーロッパの労働状態」においては、クオンスキーはこの期の労働状態を次の通り要約しているのである。「一

八九五年—一九〇三年以來イギリスにおける實質賃銀は經濟循環毎に低下したのである。労働の強度は非常に増大した。健康保險の施行も都市の住宅事情の無視のために充分効果ある手段ではないのである。失業保險の實施が増大する失業による賃銀喪失を相殺するものではないのである。……六五年間、即ち一八二〇年—一八五〇年及び一九〇〇年—一九三五年（三九年としても同様である。……岸本）の間は労働状態は疑もなく悪化した。<sup>\*</sup>労働状態が改善された年は、イギリスの資本家が、イギリス外で、即ち一部は植民地、一部は外國—歐洲大陸やアメリカで労働者を雇傭することによつて莫大な超過利潤を獲得した年であつたのである」<sup>12)</sup>と。

扱て、二十世紀に入つて以來、否、イギリスが繁榮から不況へ移行した一八七〇年代以來、労働運動においても重大な變化がおこつたことは周知の通りである。熟練工中心の經濟主義的闘争の職業別組合（craft union）から非熟練工の産業別組合（industrial union）による新組合主義へ、更に社會主義の復活へと、労働者大衆は強固に組織され、組織的闘争によつて實現されうる政治的理想に浸透されたところの労働運動の確立へと進みつつあるのである。

\* ジョン・オール（John Ort）は榮養の點から労働状態の惡化を次の如く證明している

# 一 労働者の食物

養 養	18世紀イギリス労働者の食物	1935年における1,500万人以上の労働者の食物	必要量の算定
カルシウム (グラム)	1.2	0.5	1.0
鐵 (ミリグラム)	23	9.6	15
ビタミンA (国際單位)	6,600	1,220	5,000
ビタミンB1 ( )	1,300	350	500—700
ビタミンC (ミリグラム)	110	55	75

John Orr, Food and the People, London, 1943, p. 15.  
J. Kuczyński, A Short History, p. 184 より。18世紀の計算は Drummond 教授のもの、1935年の表は週一人営り食料に9シリング以下を支出する家族である。Orr は、彼等は人口の1/3より多いとのべている。必要量の現在の算定は John Orr の書の中にある。J. Kuczyński, ibid., p. 104, Foot note.

ジョン・オールは次の様に述べている。——「労働者階級の食物の栄養価値のこの悪化の結果として、労働者大衆の體格は悪化したのである。……平均身長 (the average stature) は低くなった。……この労働者大衆の栄養状態及び體格の悪化は、次の原因による死亡率の低下によつてかくされてゐる

J. クヂンスキー「一七五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史」

のである。即ち近代的衛生原理の適用によるコレラや腸チフスやチフスの如き流行病や風土病の除去によつてである」(John Orr, Food and the People, p. 15) と。

「今日のイギリスの労働者はより高い文化水準を享受し、一層氣持よい住宅——それは必ずしもより健康的であるとはいえないが——に住んでゐるが、二〇〇年前の彼の祖先の生活より低い栄養水準にて生活してゐるとううことは争う餘地のない事實である」(J. Kuczyński, A Short History, p. 184)。

窮乏の深刻さを思うべきである。

註 (1) 「レーニン「帝國主義論」岩波文庫版」二二頁

(2) J. Kuczyński, A Short History, p. 66

(3) Ibid., p. 86

(4) (5) Ibid., p. 94

(6) Ibid., p. 95

(7) Sidney and Beatrice Webb, The Prevention of Destitution, pp. 17—8

(8) J. Kuczyński, A Short History, pp. 102—3. 尚クチ

ンスキーは「全體として云へば、今日労働状態は、今世紀のはじめよりも、労働者の健康にとつて一層悪くなつてゐるのである」(J. Kuczyński, ibid., p. 100) と述べてゐる。

(9) J. Kuczyński, ibid., p. 106

第六十七卷 四三五 第六號 一二七

- (11) Ibid., p. 105  
(12) J. Kuczynski, *Labour Conditions in Western Europe*, pp. 65—6 & p. 67  
(13) J. Kuczynski, *A Short History*, P. III 節 3 段 3 行  
労働組合の発展 4 頁  
C. Howell, *Trade Unionism, New and Old*, 1893  
M. Beer, *History of British Socialism*, Vol. II.  
Sidney & Beatrice Webb, *The History of Trade Unionism*, revised edition, 1920  
D. G. H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement*, 1939  
Th. Rottstein, *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung in England*, Marxistische Bibliothek, Bd. 11.  
Francis Williams, *Fifty Years' March*, 1948  
N. Baron, *British Trade Unions*, 1947  
A. Hutt, *British Trade Unionism*, 1937

五

今次世界大戰（一九三九年—四五年）中、イギリスの勞働者階級の状態はいかに變化したであらうか。而して今次大戰中の勞働狀態の變動は前大戰中のそれと比較していかなる相違をも

第六十七卷 四三六 第六號 一二八

つていであらうか、これが第四章においてクチンスキーが明らかにせんとしたところの問題であつた。本稿では今次大戦中の勞働状態のみを扱うであらう。

先ず、今次大戦中の賃銀並びに所得額は次の如く増加してゐる。

貸銀率, 1938—1945  
1938年10月=100

	指 數
1938年10月	100
1940 7	110 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
1941 7	118
1942 1	122
1942 7	124
1943 1	126 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
1943 7	130
1944 1	132
1944 7	135 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
1945 1	138 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
1945 7	143

労働省並びに Bowley 教授の計算, J. Kuczynski, *A Short History*, p. 126

所得の増加 1938—1945

	指 數
1938年10月	100
1940 7	130
1941 7	142 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
1942 1	146
1942 7	160
1943 1	165
1943 7	176
1944 1	179
1944 7	182
1945 1	176
1945 7	180

J. Kuczynski, *ibid.*,

p. 128

賃銀率以上に所得 (earnings) が上昇したのは、第一に労働時間が一九三八年に比較して上昇し、短時間労働 (short-time work) が通常の時間の労働 (full-time work) となり、その上に残業が附加されたことに、第二に時間外労働の賃銀は標準労働時間のそれより比較的高く支拂われ、又特別ボーナスが所得の中に含まれたが、賃銀率には含まれなかつたことに、第三に労働者が低い賃銀の産業から、例へば繊維産業から高い賃銀の産業へ、例へば機械工業へ移つたことに以上の三つの理由によるのである。それは大々次の如き割合で所得を増加させたのである。

	賃銀率の 増大による (百分比)	産業の 替りによる (百分比)	時間外 労働による (百分比)	特別 ボーナスによる (百分比)
1938年10月末	0	0	0	
1940 7	10 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	4	13	
1941 7	18	2	18	
1942 1	22	4	19	
1942 7	24	4	24	
1943 1	26 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	6	25	
1943 7	30	6	26	
1944 1	32	8	26	
1944 7	35 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	7	25	
1945 1	38 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	6	20	
1945 7	43	5	20	

J. Kuczynski, A Short History, p. 129

「クチンズキー」(一九三〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史)

年齢別性別による平均所得額, 1933—1945

	成年男子	青少年(2 1歳以下)	成年女子	少女(18 歳以下)	全労働者
1938年10月	69s. 0d.	26s. 1d.	32s. 6d.	18s. 6d.	53s. 3d.
1940 7	89 0	35 1	38 11	22 4	69 2
1941 7	99 5	41 11	43 11	25 0	75 10
1942 1	102 0	42 6	47 6	26 10	77 9
1942 7	111 5	46 2	54 2	30 3	85 2
1943 1	113 9	45 1	58 6	32 1	87 11
1943 7	121 3	47 2	62 6	33 10	93 7
1944 1	123 8	46 10	63 9	34 3	95 7
1944 7	124 4	47 4	64 3	34 11	96 8
1945 1	119 3	44 1	63 2	33 8	93 9
1945 7	121 4	45 6	63 2	35 1	96 1

J. Kuczynski, A Short History, p. 129

因みに年齢別性別の平均所得額は次の通りであつた。

然らば生計費はいかに増加し、實質賃銀はいかに變動したか。

生計費 1938—1945

		指 数	
		公 式 の 物	訂正し たもの
1938年10月		100	100
1940	7	119	120
1941	7	128	130
1942	1	129	138
1942	7	129	143
1943	1	128	145
1943	7	129	150
1944	1	128	150
1944	7	130	153
1945	1	130	153
1945	7	134	158

公式のもの (official) は労働省の  
指数、訂正したもの (revised) は  
J. L. Nicholson 氏のもの  
J. Kuczynski, *ibid.*, p. 135

J. クチンスキー「一七五〇年からイギリス労働階級状態小史」

第六十七巻 四三八 第六號 一三〇

貨幣所得生活費及び實質賃銀, 1938—1945  
1938=100

	貨幣所得	生計費	實質賃銀
1938年10月	100	100	100
1940 7	130	120	108
1941 7	142	130	104
1942 1	146	138	106
1942 7	160	143	112
1943 1	165	145	114
1943 7	176	150	117
1944 1	179	150	119
1944 7	182	153	119
1945 1	176	153	115
1945 7	180	158	114

J. Kuczynski, *ibid.*, pp. 135—6

備考 ニコルソン氏の訂正は、労働省統計は二つの點で不充  
分であるとしてなされたもの、即ち第一にこの期には、指  
数に含まれている食物に對して主として補給金が與えられ  
た。そして特に食物に對してそれが一般的支出の中での相  
對的重要性に比較して重くウェイトをおきすぎているこ  
と、第二に、指数には不適當にしか代表されていないタバ  
コや酒には直接税が課されている。その結果として指数に  
は一般物價水準の實際の反映がなされていないのである。

(J. Kuczynski, *ibid.*, pp. 134)

この實質賃銀指数に對してクチンスキーは次の如き説明を加  
え、税金や社會保險費を差引かねばならないと述べているので  
ある。——「この表から我々は戦争中大きくはないにしても實  
質賃銀が増大したという印象をうける。ピークにおいては實質  
賃銀は、この表によると戦前より $\frac{1}{2}$ だけ高い。しかし我々は今  
まで生計費の評価において何人も計算に入れなかつた一つの最  
も重大なファクタを無視して來たのである。それは直接税  
(direct taxation) の非常な増大ということである。税金が労働  
者の家計支出に何等の負擔にならない労働者の支出と考えられ

ていることは非常に奇妙なことである。ニコルソン氏は賃銀の直接税は戦前には何等の役割を演じなかつた。その直接の賃銀からの差引額は一九四〇年においては所得の約3%であつた。一九四一年には七%であつたとしている。若し我々がニコルソン氏の、賃銀総額についての他の研究で彼が作つた指数と、所得税負擔及社會保險掛金 (social insurance contributions) の指數を用いるなら、次のごとき差引額に到達するのである。<sup>2)</sup>

1940	2%
1941	6%
1942	8%
1943	9%
1944*	10%
1945*	10%

\* J. Kuczynski  
の計算 ibid.,  
p. 136

この額を賃銀から差引くなら、純賃銀賃銀指數 (net real wage index) は次の如くである。

純賃銀賃銀, 1938—45

	純賃銀賃銀
1938年10月	100
1940	7
1941	7
1942	7
1943	1
1944	7
1944	1
1944	7
1945	1
1946	7

J. Kuczynski, ibid.,  
p. 136

J. クチンスキー「一九七〇年からイギリス労働階級状態小史」  
現在に至る

クチンスキーはこれさえ高すぎるとして次の様な註釋を加えている。——「これらの指數も尙餘りに高すぎるのである。それがどれだけであるかを誰も知らないだけである。ニコルソン氏は食料の問題と缺乏 (shortage) による生計費の増大についての二、三の計算を行つた。

そしてこの計算に達するために實に巧妙な方法を用いたのである。しかし私は彼が食料の問題や物資の缺乏の結果の測定に成功しているとは考えない。賃銀賃銀を指數において現實へより接近させることは實際不可能であるが、賃銀賃銀が住宅の不足という理由からだけでも一九三八年のレベル以下であることを明らかにするためにはこれらのファクタア (食料の問題と物資の缺乏の問題) を考慮することは必要である。實際の純賃銀賃銀を計算することは出来ないが、我々はそれが一九三八年のレベルより幾分低かつたという説明で満足しなければならぬのである。これですでに非常に重要な事實である」と。

ところでかかる賃銀賃銀はいかなる生活を可能ならしめたであろうか。「賃銀は可なりな健康生活を確保するに必要な標準以下に低下した。それはそのレベル以下の標準以下にも低落した。そして更に賃銀賃銀は競争中は僅かに變化しただけであるが、生活の實際の標準 (the actual standard of life) は可なり大きく變化したのである。何となれば消費のための商品の量と質が可なり大きく變化 (惡化……岸本) したからである。」<sup>4)</sup>又現

賃の消費は次の如く減退しているのである。生活の悪化を思うところである。

消費, 1939—1944  
1938=100

	1939	1940	1941	1942	1943	1944
食料	100	85	78	82	78	83
酒とタバコ	104	101	111	110	110	111
家賃	103	103	102	101	101	101
燃料と燈火	101	103	103	101	95	95
衣服	100	83	62	61	55	62
その他	97	88	81	80	77	80
消費全體	100	88	81	80	77	80

J. Kuczynski, A Short History, p. 140

この統計は official なものである。

備考 「多くの點において悪化はこの表の示すものより非常に大きいのである。それは普通この表には反映されてない商品の品質の悪化によるのである」

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 141

擬て今次戦争中の生活水準、特に一九四五年のそれをラウントリの所謂「肉體的能率」(physical efficiency)を維持して、必要最低生活費(勞働調査局 The Labour Research Depa-

ment はこの計算の價值ある試みをなし、イギリスの戦時労働者 British war worker—彼は長時間働を烈しい労働をする—が三人の子供のある彼の家族を養うに必要な最低額を一九四二年四月で一〇〇シリングであるとしている。これに生計費の増大を考慮に入れて一九四五年一月の最低生活費を出せば一一〇シリングとなるのである」と比較すれば次の通りである。—即ち若し我々が色々の産業の男子の平均賃銀を比較すれば、三人の子供をもつた家族を養うにたる充分な賃銀を得ている産業は次の通りである。(Cf. Ministry of Labour Gazette)

Chemical, paint, oil, etc.

Government industrial establishment

Metal, engineering and shipbuilding

Paper, printing, stationery, etc.

Transport, storage, etc. (鐵道を除く)

(J. Kuczynski, A Short History, p. 139)

次の産業においては成年男子労働者の賃銀は最低額の八〇%から九九%である。

Brick, pottery and glass

Building, contracting, etc.

Clothing

Food, drink and tobacco.

Leather, fur, etc.

Mining

Public utility services

Textiles

Treatment of non-metaliferous mine and quarry

products

Woodworking

(J. Kuczynski, *A Short History*, p. 139)

農業においては賃銀は最低額の八〇%以上である。(J. Kuczynski, *ibid.*, p. 139)

「全體として次のことがいえるのである。——即ち夫だけが働き、家族が夫婦と子供三人或は三人以上の場合には労働者の殆んどは最低以下の生活をしなければならないということである。そして次のことをつけ加えるべきである。即ちすべての事情を考慮に入れるなら、妻が働いて子供が三人より少し多くの家庭においてさえ、労働者の多数はこの最低以下の生活をしなければならないということである。それは労働者階級がそれ自身の労働力 (working strength) を十分に回復することが出来ず、健康で後に充分な力をもつて働くことの出来る新しい世代を養育することが出来ないということである。充分満足な状態は戦争中期待することは出来なかつたのである。」

以上實質賃銀を検討したが、その他の労働状態について簡単に考察しよう。

J. クチンスキー「一九七〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史」

先ず労働時間について、「今次大戦前、労働者の大部分は八時間労働日のもとに働いていた。そして工場法は十六歳以下の少年の労働時間を週四十時間に制限していた。一九一四年の大戦前は労働時間をもつと長く労働者階級の大部分は少くも一日九時間は労働していた。しかし戦争がはじまるや、一九一四年においても一九三九年においても労働時間は一日當りにしても週當りにしても延長されはじめたのである。……實際労働時間は急速に延長されたので暫らく後には、即ち一九四一年には政府は、生産量、災害及び保健のために、そして不常に長い労働時間が疾病を結果せしめるということに警告するために、これに干渉せねばならなかつたのである。……労働時間の餘りの延長が生産性に及ぼす結果を認識してかどうかは別として、今次大戦前でも大戦でも週労働時間は戦争の第三年目、一九一七年及び一九四二年には減少しはじめたのである。」今次大戦中の週當り平均労働時間は次の如くであつた。

平均週労働時間 \*

時間	1938年10月
46.5	
50.0	1943 7
49.2	1944 1
48.6	1944 7
47.0	1945 1
47.4	1945 7

\* The Ministry of  
Labour Gazette.  
J. Kuczynski,  
*ibid.*, p. 151



1938年より増大した災害件数 1935—1943

	成年労働者		青年
	男	女	
1939	11,665	3,403	696
1940	38,476	9,140	4,260
1941	56,591	28,231	6,373
1942	69,113	56,618	8,796
1943	65,899	58,439	6,703
合計	241,744	155,831	25,436

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 156

	致命的災害	前年との變化	非致命的災害	前年との變化
1938	944	—	179,159	—
1939	1,104	+ 17%	192,371	+ 7%
1940	1,372	+ 24%	230,607	+ 20%
1941	1,646	+ 20%	269,652	+ 17%
1942	1,363	- 17%	313,267	+ 16%
1943	1,220	- 11%	309,924	- 1%
1944	1,003	- 18%	281,578	- 9%

これは主任工場監督官の報告である  
(Reports of the Chief Inspector of Factories).

J. Kuczynski, *A Short History*, p. 155  
報告された災害(致命的及非致命的)1939—43

	成年男子	成年女子	少年	少女
1938	134,752	14,626	22,922	7,803
1939	146,417	17,029	22,364	7,665
1940	173,228	23,766	26,492	8,493
1941	191,343	42,857	27,757	9,341
1942	203,865	71,244	29,028	10,493
1943	200,651	73,065	27,623	9,805

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 156

「一七五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史」  
労働時間の延長と労働の稀薄化<sup>8)</sup>及び労働の強度化とは次の如き災害の増大を結果したのである。

第六十七卷 四四二 第六號 一三四

クチンスキーは「災害は今次大戦中異常に増大した。労働時間も増大したことは事實であるが、この増大は災害数の増大と比較すれば全く小さいものである」とのべている。

労働状態のかかる悪化は、今次戦争が「帝國主義戦争」としてではなく、所謂「ファシズムの打倒」の戦争として「勞資協力」して行われたにも拘らず、次の如きストライキを頻發せしめたのであつた。

ストライキとロックアウト  
1939—1945 \*

	スト件数	スト繼續日數 (勞働日)
1939	337,000	1,360,000
1940	299,000	940,000
1941	360,000	1,080,000
1942	457,000	1,530,000
1943	557,000	1,810,000
1944	821,000	3,710,000
1945	530,000	2,830,000

\* Ministry of Labour Gazette.

J. Kuczynski, *ibid.*, p. 162

而して「一九三九年においては小さかつた共產黨は今や大政黨—大衆の黨 (a mass party) に成長したのである。」(N. Baron) の調査はこのクチンスキーの言葉を裏書きしていることである。即ち T. U. C. 加入組合中の四〇組合、五、九四五、七九七人の組合員についての調査で、労働黨政府支持の四組合、七二六、五八七人に對し、革新的社會變化を望む者

の数は九組合、四、〇四六、九三〇人の多きを算したのである。<sup>(11)</sup> イギリス労働者階級の急進化を思ふべきである。

註(1) J. Kuczynski, A Short History, p. 128

(2) Ibid, p. 136

(3) Ibid, p. 137

(4) Ibid, p. 138

(5) Cf. B. Seebohm Rowntree, The Human Need of

Labour, Poverty, A Study of Town Life. 労働調査局、

(The Labour Research Department) の「最低生活費の

を定める試み」“rock-bottom minimum standard”

をいふのである。

(6) J. Kuczynski, A Short History, p. 140

(7) Ibid, p. 149—150

(8) 婦人労働の比率は次の通り増大した。

百分比	
1914	11
1918	41
1939	16
1944	37

(9) J. Kuczynski, A Short History, p. 155.

(10) Ibid, p. 164

(11) N. Baron, British Trade Unions, 1947. p. 133

「クチンスキー」『一九五〇年から現在に至るイギリス労働階級状態小史』

## 六

以上クチンスキーの「英國労働状態小史」をやや詳細に紹介した。労働統計の丹念な渉獵・検討の上に展開されたクチンスキーの議論の指し示したものは、マルクスの所謂「絶對的窮乏化法則」の眞理性であつた。先進國・植民帝國イギリスの特殊性にもかかわらず、又尤大な移民にもかかわらず、イギリスの労働者階級は我々の想像を越えた窮乏化を押しすすめられたのである。特に今世紀に入つてからの窮乏化は深刻であり、このことが、労働者階級を驅つて、最低賃銀制 (Trade Boards Act) や健康保険 (Health Insurance)、失業保険 (Unemployment Insurance) 或は年金保険 (Pensions Acts) 等の社會政策を必然化せしめたのである。然し乍らこれらの相頭ぐ社會政策諸立法をもつてしても我々の見て來たごとく、労働者階級の絶對的な窮乏化は一段と深刻化したのであり、このことが、社會保障制 (social security) を日程に登じ (W. Beveridge, Social Insurance and Allied Services Report, 1942) 今次戦争後、労働者階級の壓力は廣汎な社會保障制を實現せしめたのである。イギリス社會保障制はいわばイギリス労働者階級の深刻な窮乏化の社會立法的表現に外ならないのである。労働者階級の絶對的な窮乏化は資本制生産の自然法則 (Nahr Gesetz) であり、これに抗する労働者階級の變革的な闘争の產物たる社會政策諸立法によつ

て一時緩和されつつも、窮乏化法則は結局自己を貫徹し、勞働者階級の革命的な政治闘争を益々發展せしめるのである。

註(1) イギリス社會保障制はビバレッジ案にその基礎を置くものであり、次の如き諸法律から成り立っている。

家族手当法 (Family Allowance Act, 1945)

國民保險法 (National Insurance Act, 1946)

國民保險産業災害補償法 (National Insurance [Industrial Injuries] Act, 1946)

國民健康保險法 (National Health Insurance Act, 1946)

國民扶助法 (National Assistance Act, 1947)

尙イギリス社會保障制度については次の書を参照せよ。  
Social Security, edited by W. A. Robson, London, 1948

(2) この點については拙著「社會政策論の根本問題」前編参照。

(一九五一・四・二五)

本號執筆者紹介

島 恭彦 京都大學教授

大野 英二 京都大學助教授

鎌倉 昇 京都大學大學院特別研究生

岸本英太郎 京都大學助教授